

連続コラム

— 光秀の源流を探る —

第8回 本能寺の変、その後の土岐明智一族

本能寺の変後、土岐明智一族はどうなったのでしょうか。その後の一族の様子をまとめ、コラム最終回にしたいと思います。

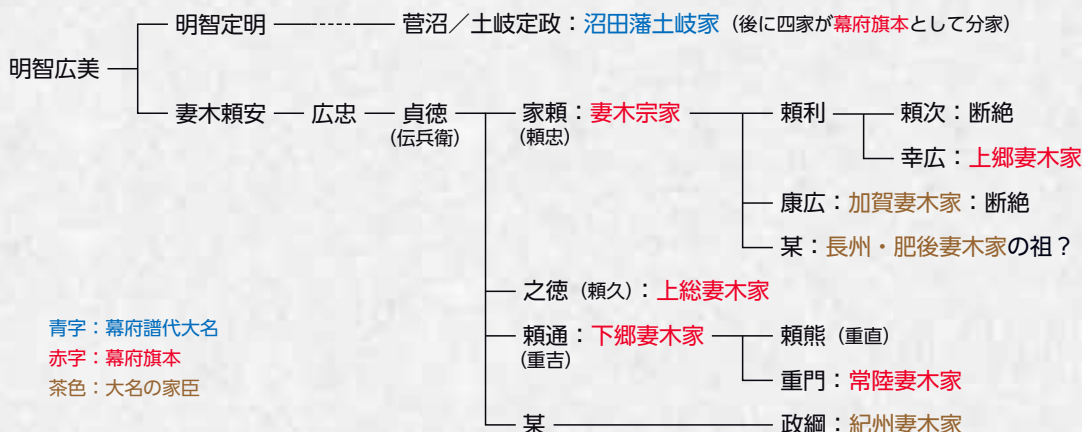
まず、土岐明智宗家とされる定政の家についてですが、定政の子定義が譜代大名となり、後に四家が分家して旗本になりました。宗家（沼田藩三万五千石）は、幕府要職に就いた当主も多く、四代頼稔は八代將軍吉宗の下で老中まで登り、十四代頼之は学問所奉行、若年寄として幕末の幕政を支えました。また、分家の溜池土岐家六代頼旨が、大目付兼海岸防禦御用掛、講武所総裁となり、マンハッタン号事件や日米修好通商条約の交渉などの大役を担って活躍しましたが、安政の大獄で失職しました。

次に、妻木家を見てみましょう。本能寺の変後、広忠の跡を継いだ貞徳・家頼父子は東濃地方を征圧した森長可に従いました。後の森家転封には付き従わず、関ヶ原の戦いでは東濃地方唯一の東軍として家康の勝

利に貢献、家頼は七千五百石の太身旗本として交代寄合に列し、後に第二人も旗本に取り立てられました。宗家は三代で断絶したものの、四家が旗本として存続し、他の大名家に仕えた分家もありました。

妻木家にも、日本史に名を遺した人物がいます。下郷妻木家二代頼熊は長崎奉行、勘定奉行を歴任して東大寺二月堂の再建に尽力、子の頼保は奈良奉行として東大寺大仏殿再建を成し遂げました。常陸妻木家八代頼矩は大目付などを歴任、十五代將軍慶喜に代わり新政府軍へ大阪城を引き渡す大役を担いました。上総妻木家十二代頼黄は明治の三大建築家の一人として知られ、日本橋などの多くの優れた建築物を築きました。最後に、光秀の子孫について、娘が嫁いだ細川家、三宅家、織田家を通して、その血は確かに受け継がれています。土岐明智一族はしたたかに江戸時代を生き抜き、その生きた証を今日まで伝えているのです。

【沼田藩土岐家と妻木諸家】



企画展開催中

期間：令和2年12月4日(金)～令和3年2月23日(火・祝)

土岐市美濃陶磁歴史館

『土岐市の文化財展 祭りと信仰』

『美濃焼って何だろう？～1400年の歩み～』